1CL1

2025年度入学者選抜

国 語 試 験 問 題

（2025年２月６日実施）

座 席 番 号									

［注　意］

1. 試験監督者の指示があるまで，問題冊子や筆記用具に触れてはいけません。触れた場合は，不正行為とみなすことがあります。
2. 試験中の使用が認められたもの以外は，すべてカバンに収納すること。使用用具は，黒芯の鉛筆またはシャープペンシル，消しゴム，鉛筆削り（電動式・大型のもの・ハンドル付のものは不可，鉛筆使用者のみ）とし，それ以外の使用は認めません。
3. **携帯電話，スマートフォン，イヤホン，ウェアラブル端末，電子辞書，ICレコーダーなどの電子機器類は，必ず電源を切ってから，カバンに収納すること。**
4. 試験開始の合図により，試験を始めてください。
5. 解答は，すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
6. 試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置くこと。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は，不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで，絶対に席を立ってはいけません。
7. 問題冊子および解答用紙は，試験終了後にすべて回収するので，**持ち帰ってはいけません。**

問題Ⅰ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

芸術の歴史は美の歴史と切っても切り離せない関係にある。西洋芸術の鑑賞態度とは、美しさを判断する態度であるべきで、たとえば「これは使えるか使えないか」といった実用性にもとづく判断を芸術に用いるのは不適切とされてきた。逆にいえば、美しさ以外の価値に重きがおかれる工芸のような生活品は、芸術とは一線を画すべきだという見方があった。

だが(1)文化人類学的にみるならば、芸術と工芸の境界は自明ではない。たとえばアート（art）の語源であるラテン語のアルス（ars）とは、もともと形成における技術を意味していたが、近代ヨーロッパの文化のなかで作者の個性が重視されるようになると、小文字のアート（art）から職人的技術を排除したところの、大文字単数で考えられるような特権的なアート（Art）になっていった。さらに、元来のつながりを取り戻すかのように一九世紀末のイギリスで起こった美術工芸運動や、二〇世紀初頭の日本で起こった民藝（みんげい）運動にみられるように、とりわけ近代以降の視覚芸術は、その領域を工芸へと拡大させていった過程ぬきでは理解できない。二〇世紀美術の代表であるキュビスムやシュルレアリスムが、アフリカ、オセアニア、北米各地の工芸から直接的な影響を受けたことはよく知られており、これらの収集には多くの文化人類学者がかかわっていた。

足並みをそろえるように芸術研究でも、芸術には美という本質がある（なにが芸術か）という見方から、芸術は制度によって芸術になる（いつ芸術になるか）という構築的な見方へのシフトが生じた。あるモノが芸術になるのは、芸術として位置づけられる歴史や理論の雰囲気、すなわち「アートワールド」にそれが参入するからであり、芸術家、批評家、収集家、美術館、博物館などから構成される「制度」によって芸術と認知されるからなのだ。(2)《メガネ》[注1]は、まさにこのような制度のなかで芸術となっていった好例といえる。つまり、実用目的で着用しているメガネ自体は芸術ではないが、それをいったん美術館に並べることに成功し、作品としての意味を歴史や理論にのっとって説明し、人びとをまきこむことができたのなら、まったく同じそのメガネは芸術としての《メガネ》になるのである。

ただし文化人類学にとって制度とは、糾弾すべき対象でもあった。たとえばジェイムズ・クリフォード[注2]は、非西洋地域の工芸が芸術の舞台へと参入するのを可能にした植民地的制度を指摘する。彼はとりわけ、収集・分類という作業をとおして、異国情緒の漂うモノをコンテクスト化し、あらたな価値を付与していった制度的かつイデオロギー的なシステムを「芸術＝文化システム」と呼び、それを可能にした(3)非対称的な権力関係を批判した。クリフォードの提起した問題はさまざまな研究者によって深刻に受けとめられた。そして、文化と芸術が同一のシステムを構成しているにもかかわらず、人類学と芸術研究が無自覚的に分業体制を続けている状況が批判された。アートワールドはあらたに「文化的価値に関する言説が生産されるもっとも重要なアリーナ[注3]」として位置づけなおされ、人類学と芸術研究の綜合（そうごう）が模索されるようになった。たとえば、芸術と文化が出会う局面としての、グァテマラ・インディヘナ（先住民）による油彩画制作を対象とした研究では、必ずしも芸術と文化のどちらかが支配的な価値として(a)クンリンするのではなく、制作者は「交渉」をつうじて、消化さ

れる差異ではなく、あらたな「(b)チョウセンする差異」を生みだしていることが指摘された。

このようにして、芸術の本質はなにかという問いは、あるモノを芸術にする制度とはなにかという問いへと代わり、とりわけ非西洋地域のモノを芸術に仕立てあげていく非対称的な権力関係にもとづく制度への批判、そして制度のなかでの人びとの抵抗実践への着目へと、力点を移していったのだった。

制度論的説明は、現代の芸術風景にたいする一定の説明を与えてくれるし、植民地主義批判という重要な論点を提起した。だがそれは、「芸術（のようなモノ）」の価値のすべてを示すことはできない。たとえば、どんなモノでも［A］には制度によって芸術になりうるとしても、私たちは特定の「芸術（のようなモノ）」を前にしたときに生じるゾクゾクした感じや、うっとりした感じを知っている。それを「アートワールドが制度化した感覚」と言ってしまうのでは、なにか物足りない。では私たちはその感じを、いったいどう理解すればよいのだろうか。

そもそも、モノにかんする人類学は(4)物質文化研究によって牽引（けんいん）されてきた。「物質文化」とは、人間が文化的な活動をとおして生みだしたすべてのモノをさし、装飾品や宗教的彫像などはもちろん、釣具や鍋といった生活用品もふくむ。物質文化研究はもともと、未開社会から新奇なモノを収集するという植民地的プロジェクトと手をたずさえながら、一九世紀ごろより西ヨーロッパを中心に発展した。初期の研究において物質文化は、それを生みだす技術や社会がどれだけ洗練されているかを測定する指標とみなされた。とりわけ人類学、考古学、博物学が協力することで、たとえば化石から進化の段階を決定することができるように、社会の発展の度合いは、そこにある物質文化から読みとることができるのだとされ、大量のモノが収集され、諸文化が分類された。この収集・分類という作業をとおして、非西洋地域の諸社会は、ヨーロッパ・ヴィクトリア朝式の社会を頂点とするような［B］発展図式の内へと振り分けられていったのだった。この成果が現在の博物館の土台ともなった。［Ⅰ］

このような進化主義的な見方は次第に退けられていったが、一連の研究が開拓した技術論自体は、考古学や人類学を横断した物質文化研究の(c)キバンとなった。また(d)タンネンに物質性と向きあうという物質文化研究の基本は、モノはたんに意味を「表している」のではなく、その物質性において意味「それ自体」なのであり、たとえばパプアニューギニア・ニューアイルランド島の葬送儀礼で用いられるマランガン彫像とは、故人を「表している」のではなく、故人「それ自体」として葬送儀礼をとおして死んでいくのだといった、［ア］を乗り越えるための人類学的研究にもつながっていった。［Ⅱ］

物質文化研究とときに重なりながらも、あえて芸術という概念を背負いつづけた研究の多くは、それぞれの地にはそれぞれの芸術（文化）があるという、文化相対主義的な姿勢をとった。そして、西ヨーロッパとは異なる歴史的・文化的背景をもつモノの独自の文脈に着目し、それらの意味や価値を考察してきた。［Ⅲ］

たとえば非西洋地域に見いだされたある種のモノを「未開芸術」と名づけて、最初に民族誌を書いたのはフランツ・ボアズだ。ボアズはまず、芸術は美という観念によって特徴づけられると考えた。

そして非西洋地域のモノも［イ］から無縁ではなく、美はどんな文化にも存在するものの、美を示す形態はそれぞれであるため、諸文化の芸術は相対的に見究められるべきだという主張（文化相対主義）を展開した。またエドマンド・リーチは、世界各地の民族には多様な美術の形式がみられるが、審美的気質に基本的な違いはないとした。だが「未開美術」では音楽、踊り、詩、造形美術などが［C］のまま(e)フクゴウ体を形成しており、多くは祭礼装飾という用途をもつため、西欧美術とは異なる鑑賞の視点が必要であることを説いた。［Ⅳ］

日本では木村重信が「未開芸術」という進化論的な呼称を退け、あらたに「民族芸術」という概念を提唱した。第一に民族芸術の作者は、所属する社会にあるなにかを表すのであって、個人的な考えや感情を表現するのではない。次に民族芸術とは、額縁のような閉じた小宇宙ではなく現実の空間を場所とし、現実の人びとの美意識を凝集したかたちで示す。それゆえに民族芸術は、作者と作品との関係よりも、作品と享受者との関係に重点があり、民衆の生活と強く結びついているのである。

［Ⅴ］

このようにして文化人類学では、諸文化に息づく多様なモノを「〇〇芸術」として相対化するなかから、芸術自体を再定義することをつうじて、工芸と芸術との接合を試みてきた。ここにみられるのは、さまざまな文化において、「私たち」と「彼ら」双方にとって美的と呼べるような判断が存在する一方で、その判断は美術館で私たちがやっているように独立しているわけではないという考え方だ。

（渡辺文（わたなべふみ）「モノと芸術」出題の都合上、一部中略した箇所がある）

（注1）《メガネ》……二〇一六年にサンフランシスコ現代美術館に置かれたメガネ。説明書きの近くの床の上に置かれたことで、人びとはなんとかその意味や美しさを理解しようとし、その様子がメディアでも話題となった。真相は二人の若者によるイタズラで、彼らは人びとがメガネを芸術作品として扱う様をＳＮＳに投稿し、芸術とは何かを問うた。

（注2）ジェイムズ・クリフォード……アメリカの文化人類学者・文化評論家（一九四五～　）。

（注3）アリーナ……ここでは、「注目される場」といった意味。

問1　傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、(a) 1 、(b) 2 、(c) 3 、(d) 4 、(e) 5 。

(a) クンリン　1

① 窓際にガラス製のフウリンを取り付ける。
② 自治体の予想金額とリンモウの差もない。
③ リンジョウカンにあふれる演奏に感動する。
④ 自転車を駅のチュウリンジョウに止める。
⑤ キンリンの家族と公園を散歩する。

(b) チョウセン　2

① 相手をチョウハツするような態度を取る。
② 履歴書に顔写真をチョウフする。
③ 規律を守らない者にチョウバツを与える。
④ 雲の動きに嵐のゼンチョウを見る。
⑤ 高層階からのチョウボウは抜群だ。

(c) キバン　3

① 店の前に大きなカンバンを設置する。
② タコにはたくさんのキュウバンがある。
③ マラソンの競技者に車がバンソウする。
④ バンユウを振るって改革に取り組む。
⑤ 大器バンセイを目指して努力する。

(d) タンネン　4

① トラブルが元で人間関係がハタンした。
② ドタンバで想定外の力を発揮する。
③ 各地の図書館をタンボウする。
④ ことのホッタンはある人物の言葉だった。
⑤ 地元農家がタンセイこめて作った漬物。

(e) フクゴウ　5

① 物語の随所にフクセンを張り巡らす。
② 養生シートで地面をヒフクする。
③ ボランティア活動で公共のフクシに貢献する。
④ 物事をフクガン的に考察する。
⑤ 独自の技術で美術品をシュウフクする。

問2　傍線部(1)「文化人類学的にみるならば、芸術と工芸の境界は自明ではない」とあるが、「境界」が「自明ではない」のはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、 6 。

① 芸術は、形成における技術のうち作者の個性が重視されたものとされているが、作者の個性は工芸にも表れるから。

② 芸術研究では美しさだけを基準として作品の価値を判断するが、文化人類学では作品の実用性も重視するから。

③ 芸術と工芸の区別は、作者の個性を重視する近代ヨーロッパの文化のなかでのみ有効な地域限定の概念だから。

④ 文化人類学では、作品の美しさではなく、作品の実用性や他の地域に及ぼした影響について研究しているから。

⑤ 芸術も工芸も技術の一種という意味で同源であり、近代以降の視覚芸術の領域には工芸も含まれているから。

問3　傍線部(2)「《メガネ》は、まさにこのような制度のなかで芸術となっていった好例」とあるが、この「《メガネ》」が「芸術となった」のはなぜか。その理由を四十五字以内で説明しなさい。解答番号は、 7 。

問4　傍線部(3)「非対称的な権力関係」とあるが、どのような点が「非対称」なのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、 8 。

① 非西洋地域のなかで、西洋の植民地であった地域の工芸品だけが芸術作品として認知されているという点。

② 非西洋地域の工芸品が芸術作品として認められるかどうかを、西洋地域の制度が判断しているという点。

③ 同一の工芸品について、芸術研究では芸術作品として扱い、人類学では工芸品として扱っているという点。

④ 非西洋地域のモノは異国情緒という付加価値を持つため、西洋のモノよりも芸術として認知されやすいという点。

⑤ 西洋では非西洋地域の工芸品を収集しているが、非西洋地域では西洋の芸術作品が収集されていないという点。

問5　空欄 A ～ C に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、9 。

① A＝本質的　B＝直線的　C＝没個性
② A＝理論的　B＝段階的　C＝不連続
③ A＝便宜的　B＝一点的　C＝無分別
④ A＝潜在的　B＝単線的　C＝未分化
⑤ A＝暫定的　B＝階層的　C＝非日常

問6　傍線部(4)「物質文化研究」についての説明として**適当でないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、10 。

① 未開社会から新奇なモノを収集するという近代ヨーロッパの植民地的プロジェクトと連動して、一九世紀ごろから発展した。
② 文化的な活動によって生みだされたモノを、それを生みだす技術や社会の洗練の度合いを測定する指標とみなした。
③ 人類学、考古学、博物学などいくつかの学問分野が協力してモノの収集と諸文化の分類を行い、研究の土台を築いた。
④ 装飾品や宗教的彫像だけでなく、生活用品もふくめたあらゆるモノを収集・分類した成果が、現在の博物館の土台となった。
⑤ 葬送儀礼で用いられるといった、モノが持っている意味ではなく、モノの物質性だけに向き合うことを基本姿勢としている。

問7　次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の Ⅰ ～ Ⅴ の中から一つ選びなさい。解答番号は、11 。

そこから形成されたのが、芸術（審美性）と工芸（実用性）は切り分けられないという、現在にも通ずる文化人類学的な芸術観である。

① Ⅰ　② Ⅱ　③ Ⅲ　④ Ⅳ　⑤ Ⅴ

問8　空欄 ア ・ イ に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 12 、イ 13 。

ア 12

① 神秘主義　② 偶像崇拝　③ 神仏習合論
④ 恣意的解釈　⑤ 物心二元論

イ 13

① 西洋の影響　② 美的な評価　③ 独自の技術
④ 私的な表現　⑤ 社会の進化

問9　本文で述べられた「文化人類学」の考え方を踏まえて、「美」の性質が他とは**異なるもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、 14 。

① 寺院に安置されている仏像
② 有名な画家が描いた風景画
③ ヨーロッパで伝承されてきた刺繍
④ 教会内に作られたステンドグラス
⑤ 伝統的な祭礼で着用された衣装

問10　本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、 15 。

① 芸術研究の観点は、芸術の本質はなにかということから、モノを芸術にするのはどんな制度かということへ変化し、さらに芸術と工芸の境界はどこにあるかということが加わった。
② 近代以降の文化人類学は、物質文化を指標として非西洋地域を「未開」と位置づけてきたことへの後悔から、その成果を否定し、新たな指標を構築することを目指して再出発した。
③ 美術館には、世界各地の民族がもつ多様な美術の形式に合わせた鑑賞の視点について説明し、人びとが諸民族の作品を芸術作品として認知できるように促進するという役割がある。
④ あらゆるモノはそれを芸術として扱う場に置き、芸術として説明すれば芸術とみなすことができるが、そのような制度的に作られた美では、人間の美的判断のすべてを説明できない。
⑤ 西洋芸術の美は、美術館のような特定の空間で作品そのものを鑑賞することでわかるが、民俗芸術や工芸品の美は、それが実際に使われている生活の場でのみ感じ取ることができる。

問題Ⅱ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「失われた20年」と呼ばれ、バブル崩壊の暗いムードが長引く中、「ゆとり世代」は「第一次就職氷河期」の余韻が残る時代を生き、一部は「第二次就職氷河期世代」とも呼ばれました。

一方、Z世代は、アベノミクス景気や超人手不足の中、超売り手市場で「バブル期超え」や「(1)ダイヤモンドの卵」と呼ばれました（少なくともコロナ禍前までは）。

このように、「ゆとり世代」とZ世代は、連続した世代でありながら、生きた時代背景が大きく違うことがお分かりいただけたと思います。

「平成不況」によって「消費離れ」を起こした「ゆとり世代」に対し、Z世代は、アベノミクス景気と長く続く少子化、加えてそもそも同世代人口が少ない（「ゆとり世代」の初期の人たちが1学年で120万人いたのに対し、「Z世代」は110万人にまで減っている）ことによる「超人手不足」によって、進学、バイト、就活、転職と、「ゆとり世代」と比べると、不安や競争の少ない安心・安定した生活を送ってきました。

私もこの数年、Z世代から、彼らの恵まれたバイトの就業状況の話を散々聞いてきました。

「バイトの時給が、年々上がっていく実感があります。時給を高くしないとバイトの応募がこなかったり、バイトがすぐに辞めちゃうみたいで」

「居酒屋など若者に不人気な肉体労働的なバイトは、単に時給が高いだけでは人が集まらなくなっており、数カ月に一度、皆で飲み会をやったりBBQをやったりして、バイトメンバー同士の仲を良くさせて、少しでも辞めにくい状況を作っているところが多いです。もちろん、こうした懇親会の費用は全てお店持ちです」

就職活動でも、この数年で、いわゆる「逆求人サイト」が盛り上がってきており、これも「Z世代」の恵まれた採用・就業状況を表しています。

「逆求人」とは、求人に対して学生が応募する従来型の就活スタイルとは異なり、学生がそのサイトに自分の強みや学生時代にやってきたことなどのプロフィールを(a)ノせ、それを見て魅力を感じた企業側からその学生にアプローチをするというスタイルの採用サイトです。

アベノミクス以降、2012年あたりから続く超売り手市場の中、従来の求人サイトで募集をかけても、学生からの応募が十分に得られない企業（主に知名度の低い企業、不人気の企業、中小企業）が増えていることがこうした逆求人サイトの誕生や普及の背景にあります。

逆求人サイトとして有名なものとして、OfferBox、キミスカ、dodaキャンパスなどがあります。

逆求人サイトの中でも大変［　A　］なものとして、ビズリーチが運営する「ニクリーチ」というものがありました。

これは「就活生と企業をお肉で繋ぐサービス」という［　B　］で、スカウトがきた就活生は企業から焼肉を奢ってもらえ、企業の人事担当者と交流できるというものです（ただし、2015年に始まったこのサービスは、コロナ禍の2020年7月30日に終了）。

就活生が焼肉をご馳走になりながらその企業の話を聞くことができる――まるでバブル期を

［ア］、いや、それ以上のダイヤモンドの卵っぷりと言えます。

同世代の人口が多いので競争も激しく、加えてバブル崩壊によって景気も悪く、就職やバイトの状況が恵まれていなかった「ポスト(b)ダンカイジュニア」（1975～82年生まれ）の私は、いつもZ世代の話を聞いて、羨ましく思ってしまいます。

ただし、新型コロナの感染が広まってから急に、「バイトの面接って、どんなバイトでも基本的には落ちることはないものだと思っていましたが、コロナになってから周りで落ちる友達が増え、本当に驚きました」といった発言をZ世代の学生たちからたくさん聞くようになっています。また、新型コロナによって第三次就職氷河期が生じる可能性もあるので、今後、少し状況が変わっていく可能性がある点は(c)リュウイしなくてはいけません。

少なくともこれまでのZ世代は、進学、バイト、就活、転職と、「ゆとり世代」と比べると、不安や競争の少ない生活を送ってきたので、(2)彼らは「chill（チル）」という価値観を持つようになりました。

「チル」とは、元々はアメリカのラッパーたちのスラングで、「chill out」の略です。日本語では「まったりする」という言葉が近い［C］だと思います。

Z世代に人気の、自身もZ世代であるラッパーの空音（そらね）やRin（りんね）音が、上の世代のラッパーと違い、ダウンテンポのラップを歌っていることも、同じくZ世代に人気のYouTuberであるEvisJap（えびすじゃっぷ）が、andchill（アンドチル）というネーミングのアパレルを立ち上げたことも、Z世代の「チル」という感覚を象徴しています。

私があるZ世代に電話し、飲みに(d)サソおうと「今、何してる？」と聞いた時に、「今っすか？今、自分の部屋でネフリでチルってます（ネットフリックス（注1）を見ながらまったりしています）」という返事をされたことがありますが、例えば、このように使うようです。

私が日頃からたくさんのZ世代と接する中でも、チルっている人が多いと感じます。チルっているということは、マイペースに居心地よく過ごすということであり、会社などの［イ］で彼らを動かそうとすることが、本当に難しくなっていることを意味します。

20年以上もの長い間、若者研究を続けている私の感覚では、第一次就職氷河期の余韻が残り、第二次就職氷河期世代もいた「ゆとり世代」が学生だった頃は、私の研究を手伝ってくれている彼らにやる気を出させるために「こんなこともできないと、どこにも就職できないよ」などと、就活不安につけ込んだ「危機感訴求」をすると、それが大変効果的で、(3)彼らの目の色が変わっていました。

ところが、逆求人サイトが全盛の、超人手不足の時代を生きてきたZ世代には、この「危機感訴求」はあまり効かなくなっています。

なぜなら、「原田（注2）さんは、そんなことじゃ就職できないというけど、ゼミのアホな先輩は結構いいところに就職できているけどなあ」という反論がすぐに彼らの頭に浮かんでしまうほど、時代が超売り手市場になったからです。

また、Z世代は「働き方改革」や「ワークライフバランス」というキーワードの普及とともに育ったわけですが、こうした「チル」という価値観と相性の良い「優しい時代」になっていったことも、

彼らがこうした世代特徴を形成する一因になったかもしれません。

以前、大手レコード会社のエイベックス代表取締役社長（当時）の松浦勝人（まつうらまさと）氏が、三田労働基準監督署から「実労働時間を管理していない」「長時間残業をさせている」「残業代を適正に払っていない」と指摘され、改善勧告を受けた時に、「好きで仕事をやっている人に対しての労働時間だけのヨクセイは絶対に望まない。好きで仕事をやっている人は仕事と遊びの境目なんてない。僕らの業界はそういう人の『夢中』から世の中を感動させるものが生まれる。それを否定して欲しくない」(e)といった内容をブログに書き、(4)炎上したことがありました。

戦後の根性論が残っている最後の世代である私からすると、松浦氏の意見に共感してしまう面もありますが、優しい時代を生き、「チル」という価値観を重視するZ世代の多くに、この考えは通じなくなっているように思います。

どんなに楽しい仕事であっても、チルっているマイペースな彼らはプライベートの方が大切で、プライベートを超えるほど魅力のある仕事はそもそも存在しない……これがZ世代の多くの考え方であるように思います。

（原田曜平（はらだようへい）『Z世代　若者はなぜインスタ・TikTokにハマるのか？』／光文社新書
出題の都合上、一部中略した箇所がある）

（注1）ネットフリックス……映画やドラマなどを配信するストリーミングサービス。

（注2）原田さん……著者の呼び名。

問1　傍線部(a)〜(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、(a) 16 、(b) 17 、(c) 18 、(d) 19 、(e) 20 。

(a) ノせ　16

① 家族の無病ソクサイを祈願する。
② トラックのセキサイ量を守る。
③ 粉骨サイシンして政局の安定をはかる。
④ 個人のサイリョウの範囲が大きい仕事。
⑤ 聞き逃さないようショウサイにメモを取る。

(b) ダンカイ　17

① 何事にもカイギ的な態度を取る。
② 厳しいカイリツのある宗教。
③ 人気がある会なので欠席者はカイムだ。
④ 大きなギンカイを地中から採掘する。
⑤ 肥料として畑にセッカイをまく。

(c) リュウイ　18

① 理科の実験でリュウサンを扱う。
② 海底がリュウキしてできた島。
③ 有望な選手の移籍をイリュウする。
④ 空気中のビリュウシを観測する。
⑤ 世相を巧みにとらえたセンリュウ。

(d) サソおう　19

① ユウリョすべき事態に立ち向かう。
② 歴史に残るエイユウにあこがれる。
③ 危機が迫るなか彼はユウゼンとしていた。
④ ユウカンな若者の決断が功を奏した。
⑤ 外国人観光客のユウチに努力する。

(e) ヨクセイ　20

① 午前中に発送すればヨクジツに届く。
② 聞き取りやすくヨクヨウをつけて話す。
③ 大型の鳥がリョウヨクを広げる。
④ 同窓会の支援の恩恵にヨクしている。
⑤ ヒヨクな土地で作物を育てる。

問2　傍線部(1)「ダイヤモンドの卵」とあるが、この比喩表現にはどのような意味が込められているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、21 。

① 優れた資質をもつもの。
② 普遍的な価値があるもの。
③ 希少で入手が困難なもの。
④ 純粋で非常に美しいもの。
⑤ 堅固に自分を守るもの。

問3　空欄 A ～ C に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、22 。

① A＝オリジナル　B＝コンテクスト　C＝センテンス
② A＝ラジカル　B＝アイディア　C＝メタファー
③ A＝アイディアル　B＝バリュー　C＝アイロニー
④ A＝ユニーク　B＝コンセプト　C＝ニュアンス
⑤ A＝エポック　B＝アピール　C＝パラグラフ

問4　空欄 ア ・ イ に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 23 、イ 24 。

ア 23
① 彷彿（ほうふつ）とさせる　② 歯牙にもかけない　③ 真っ向から否定する
④ 換骨奪胎した　⑤ 一泡吹かせた

イ 24
① 経済の枠組　② 組織の論理　③ 大人の空事
④ 虚構の組織　⑤ 日常の倫理

問5　傍線部(2)「彼らは『chill（チル）』という価値観を持つようになりました」とあるが、Z世代が「chill（チル）」という価値観を持つようになったのはなぜか。その理由を四十字以内で説明しなさい。解答番号は、25 。

問6　傍線部(3)「彼らの目の色が変わっていました」とあるが、これはどのようなことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、26 。

① 就職に対する不安をあおるような筆者のやり方に憤慨したということ。
② 就職できないかもしれないという不安で元気をなくしたということ。
③ 学生同士がお互いに助け合って、研究する能力が高まったということ。
④ 就職することができるように、熱心に取り組むようになったということ。
⑤ 筆者のおどしに屈しないように、学生同士が結束したということ。

問7　傍線部(4)「炎上したことがありました」とあるが、この「炎上」について、筆者はどのように捉えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、27 。

① 炎上したブログの内容の正当性を認めつつ、経験上その考え方がZ世代には理解不可能であることを示唆している。
② 炎上したブログの内容を時代錯誤な考え方として退ける一方で、Z世代の考え方にも共感はできないと考えている。
③ 炎上したブログの内容に共感しつつ、Z世代にとってはその考え方が受け入れられないことにも理解を示している。
④ 炎上したブログの内容もZ世代の考え方も理解はできるものの、どちらにも共感はせずに客観的に観察している。
⑤ 炎上したブログの内容とZ世代の考え方の違いが、Z世代と他世代の世代特徴の違いを象徴すると分析している。

問8　本文における「Z世代」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、28 。

① 「ゆとり世代」と連続する世代であり「消費離れ」の傾向を継承している。
② 少子化の影響で同世代人口が少ないため、競争よりも協調を重んじる。
③ 先行する世代と比べ、バイトや就職の不安が少ない時間を長く過ごした。
④ 「働き方改革」や「ワークライフバランス」という考え方を普及させた。
⑤ 仕事もプライベートも、マイペースに楽しむことを第一に考えている。

問9　本文に挙げられている具体的事例と本文の論の展開に関する説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、29 。

① 店が費用を負担してバイトメンバー同士の懇親会を設けるという話は、Z世代が経済的に恵まれており、お金よりも人間関係の居心地のよさで職場を選ぶことを象徴している。

② バイトがすぐに辞めないように時給を高くしたり懇親会を設けたりするという話は、自分にとって快適でないことは他に押しつけるというZ世代の利己的な行動原理を反映している。

③ 就職活動における「逆求人サイト」の盛り上がりについての話は、不況と人手不足により、知名度の低い企業や不人気の企業が増加しているという社会的・経済的背景を示唆している。

④ 「ニクリーチ」とその終了についての話は、売り手市場で恵まれていたZ世代の採用・就労状況を示すと同時に、コロナ禍による第三次就職氷河期の到来の可能性を示唆している。

⑤ 筆者に対する「ネフリでチルってます」という、あるZ世代からの返事は、デジタル機器の扱いに精通し、自身の能力に自信があるため物怖じしないZ世代の特徴を反映している。

問10　本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、30 。

① 「ゆとり世代」とZ世代は、時間的には連続しているが、両者を取り巻く社会や経済の状況は対照的であるため世代間の意識の違いが大きく、職場や家庭などの空間においては世代間に深い断絶がある。

② Z世代は進学や就職に不安が少ない生活を送ってきたため、マイペースだが他者と競う気持ちが少なく優しいという美点を持つ一方、つらい肉体労働やコロナ禍のような不測の事態への忍耐力に欠ける。

③ Z世代が自分にとって居心地のよい環境を求める意識は、それに呼応する形で「ニクリーチ」や「チル」などの新しいサービスや価値観を創出させ、社会を刷新していく原動力としての役割を果たしている。

④ Z世代はマイペースに過ごすことを重視する一方で、バイト同士で辞めにくい状況を作ったり、自分たちの感覚に反するブログを炎上させたりするなど、他者と同調して行動するという二面性がある。

⑤ 仕事よりもプライベートを重視し、マイペースに過ごすといったZ世代の特徴は、「ゆとり世代」やそれ以前の世代との比較に加えて、「チル」という価値観と考え合わせることで理解することができる。

国語（20250206）　解答一覧

大問	小問	解答番号	正解
Ⅰ	問 1	1	③
		2	①
		3	②
		4	⑤
		5	④
	問 2	6	⑤
	問 3	7	記述問題
	問 4	8	②
	問 5	9	④
	問 6	10	⑤
	問 7	11	③
	問 8	12	⑤
		13	②
	問 9	14	②
	問 10	15	④
Ⅱ	問 1	16	②
		17	④
		18	③
		19	⑤
		20	②
	問 2	21	③
	問 3	22	④
	問 4	23	①
		24	②
	問 5	25	記述問題
	問 6	26	④
	問 7	27	③
	問 8	28	③
	問 9	29	④
	問 10	30	⑤